新山協ニュース

発行者　平田大六　発行所　新潟県山岳協会
〒951　新潟市下旭町109　鈴木敏雄方　TEL025−222−9548

総体一次 上越・中越地区大会報告

直江津高校　姫川原　宗　明

平成8年4月18日から20日まで、新潟県高体連登山部上・中越地区総体一次予選大会が東頸城郡安塚町の菱ケ岳を会場として行われた。

以下、主管校の責任者として大会運営に当たった立場から、報告をさせて頂く。

2月下旬に上越地区の顧問による1回目の準備会議を開催し、日程・内容・役割分担等を決める。3月中旬に大会開催案内を各校に送付。4月5日に締め切る。男子16校88名、女子7校28名、顧問28名、合計144名の参加申し込み。3月28日に主管校顧問と地区専門委員で事前踏査を行う。安塚町役場、警察、消防署、医療機関等への協力依頼、挨拶を済ませ、大会直前の4月15日、上越地区顧問による最終打ち合わせを行って、大会当日を迎えた。

第1日目（4月18日）午前中は雨混じりの強風で、麓のキューピットバレイスキー場付近では霰が降る始末。幸いに午後からの開会式の頃には天候が回復して青空が広がる。まずは一安心。

開会式では地元安塚町の矢野学町長から選手激励の挨拶を頂く。式終了後、各校単位で幕営地のグリーンパークまで、キューピットバレイスキー場のゲレンデを登る。今年はとりわけ雪が多く、この時期でもべったりと雪が付いている。

幕営地に到着後、各班に分かれて、雪上幕営の講習。顧問会議後の班長会議で、明日の技術指導の打ち合わせを行う。

第2日目（4月19日）5時起床。天候は晴れ。予定通り6時半に出発。菱ケ岳の山頂を目指しながら、途中の斜面を雪上歩行訓練、キックステップ、滑落停止の練習等を行う。

出発してから1時間も経ないうちに天候は急速に悪化。中腹にあるゴンドラ山頂駅に着く頃には完全にガスって、視界がきかなくなる。

9時50分山頂（1129m）着。予定ではこの後、長野県境の稜線へ移動して、ザイルワークの練習を行うことになっていたが、ガスのため移動は無理と判断。下山して、ゴンドラ駅付近の斜面を利用して行う。班長、生徒とも非常に熱心で、寒さの中2時間近くも練習する。顧問もこの時間を利用して、技術顧問の三条工業高校吉田先生から、たっぷりと講習を受ける。

13時、幕営着。思い思いの時間を過ごす。天気図作成、炊事を行い21時就寝。夜中にテントを叩く雨の音で目がさめる。

第3日目（4月20日）5時半起床。雨は止んだが、代わりに雪が舞っている。

この日は、旧須川小学校体育館へ移動して高田盲学校霜鳥弘道先生の講演を聞く。内容は1994年2月、海谷山塊の鉢沢で起きた雪崩遭難事故について。一同、貴重な体験談にじっと耳を傾ける。淡々としたその語り口に岳友の死という深い悲しみが表現された講演であった。

講演終了後、閉会式。吉田先生に講評を頂いて、三日間に渡る大会の幕を閉じる。

山岳部顧問になって2年目。初めての大会運営で、手落ち等多々あったと思うが、事故もなく無事終了できた。

色々とご指導、ご援助頂いた上越地区の顧問の先生方、並びに技術指導をお願いした吉田先生はじめ班長の先生方に紙面を借りて厚く御礼申し上ます。

高体連登山部 春季上越地区登山大会報告

高田工業高校　平田　昭

高体連春季上越地区登山大会は5月8日（水）から9日（木）にかけて、米山（992・6m）で行われました。しかし、9日はあいにくの悪天候で頂上を極めることができず、途中で登山行動を中止せざるをえませんでした。参加人数も4校21名と、ご紹介するのも恥ずかしいほどで、輝かしい「県山協ニュース」紙上を汚すにしのびません。

かといって、これだけでは報告にもなりませんので、準備段階の「ごたごた」を含めて、事前踏査の様子をご報告して責めを果たしたいと思います。

高体連上越地区では、春季大会の会場として、三田原山、米山、明星山などを使わせてもらってきました。今年は3年ぶりの三田原山ということで計画を進めてきましたが、雪のある時期でないと難しいコースですし、危険も少ないので重宝しておりました。3月末に関係各機関へ挨拶にうかがった折り、いつにないほど残雪が多く、少々気になってはいました。しかし、幕営予定地である笹ケ峰は有数の観光地であり、「5月のゴールデンウィークまでには除雪も終わるでしょう。」という地元関係者の声を頼りに、予定どおり要項を発送しました。

ところが、大会も近づいた4月下旬、顧問会議を開く都合、除雪の進捗状況をお尋ねしようと電話すると、「雪が多くて、とてもじゃないが連休前に除雪にはとりかかれそうもない。」とのこと、除雪は5月6日から開始し、終了（あくまでも予定）は16日になるという話にびっくり仰天しました。豪雪に加えて、4月に入ってからの低温で雪解けが遅かったのでしょう。改めて大自然の力に圧倒される思いでした。

大会は目前に迫っていましたので、当番校はあわてました。運営の役割分担をするはずの顧問会議が、会場変更を協議する場となりました。

準備時間がないこと、当番校の力量不足も考えて、米山にのぼる（すがる）ことに決定したのが4月の25日です。米山はいくつもの登山コースがありますが、一昨年青海川を出発して谷根コースを登り、吉尾口へ下りて笠島駅まで歩くという大会がありました。そこで今回は、大平から登り、吉尾へ下りて大平へもどるというコースにしました。

26日、大平地区の地区長さん加茂井要さんを訪ね、幕営のお許しをいただきました。27日事前踏査でコースを歩いてみました。天候は晴れ。途中で登山道を補修しているボランティア（？）の方々にお会いしましたが、リケンという会社の登山クラブの皆さんだという話でした。山頂の小屋で天ぷらを一口ごちそうになったから言うのではありませんが、重い補修用材を背負ってのお仕事、ほんとうにありがたいことだと頭が下がりました。

残雪は予想以上に深く、標高650m通称ロマンスヒルから上はところどころ雪に埋もれていました。されに標高800mくらいから上はぺったりと雪に覆われ、急斜面を直登する形。まるで三田原を登るような雰囲気です。この季節の米山としては珍しいことではないでしょうか。

一昨年の大会も同じ時期だったのですが、米山は麓から頂上まで、少しずつ季節をずらしながらも全山花に覆われた美しい山という印象でした。とくにヒメシャガとシラネアオイの淡い紫の美しさは忘れられません。しかし、今年の米山はまだ花の香りはありませんでした。中腹でさえマンサクの花がやっとです。麓でもカタクリはやっと咲いている程度でした。

下りの吉尾コースは北斜面ですので雪解けも一層遅れているようでした。利用する人も少なく、踏み跡も見えませんが、2メートルほども残っている雪の急斜面を下りました。赤布をつけながら下る途中、ウサギの糞をたくさん見ました。ところがそばにある足跡がどうもウサギのものではない。もっと大きく、ヒズメのようなものがあるのです。まさかカモシカでも？　と半信半疑でいたのですが、突然目の前にカモシカが姿を現しました。どうも新芽を食べながら尾根を下っていたらしく、わたしたちはその後についていたようです。これほど至近距離でカモシカを見るのは初めてでしたが、見れば頭には立派な角もあります。大きさも子牛くらいはありそうです。驚かして「窮鼠猫を噛む」ならぬ「窮羚羊人を突く」というような具合になっては怖いので、「おうい、おうい……」と、わざと間の抜けた声を出して道を譲ってもらいました。見るとツツジの新芽を選んで食べているようでした。

吉尾から大平までの道は、廃道に近く、今では通る人もほとんどいないと聞きました。廃屋の前で火を焚いている人がいましたが、採ったばかりのゼンマイを煮ているのでした。

2度目の事前踏査は大会直前の5月6日に行いました。今度は天候に恵まれず、登山口では曇ながら、登り始めるとすぐ雨に変わりました。10日足らずの間にも雪解けは進み、登りはほとんど登山道が出ていました。尾根へ出ると風も強く、気温も下がってきました。やっとの思いで山頂に着き小屋のドアを開けると、そこは別世界。5パーティ30人ほどいらしたでしょうか、歌こそなけれ、飲めや食えやの大宴会の最中でした。連休最後の登山ということで、悪天候をおして登ってこられた方が多かったのでしょう。それにしても、あの酒の量とご馳走の数々は、山頂ではなく、夜の仲町（高田市内の飲食街）へ迷い込んだような錯覚を引き起こしました。ちょっぴりうらやましくも感じながら、どうかご無事でと祈りながら、早々に吉尾コースを下ってきました。

訃報

新潟楽山会の村上綾子氏は、7月21日中央アルプス宝剣岳より滑落され翌日遺体で発見されました。ここに謹んでご冥福をお祈りします。

日山協クライミング委員会 全国研修会報告

新潟山岳会　堀　昌明

1996・4・13～14
参加者
新潟山岳会　阿部信一、此村　孝、嶋原哲也、本間　尚子、堀　昌明
高田ハイク　稲田春男

神奈川県秦野市に於いて前記研修会が開催され、新潟県山岳協会クライミング委員会を中心に参加してきたので報告する。内容はフリークライミングについて、現状、安全、セッティング、国体、模擬コンペなど多岐に渡った。

会場となった秦野市は2年後、平成10年に国体会場となる点、日本山岳協会の人工ボードがある点で昨年から研修会に使用されている。新潟からはいささか遠いが、帰りの車中ではその時間が短く感じられるほど盛り上がっていた。

さて、13日は机上研修で、挨拶の後さっそく北山氏による「クライミングコンペの持ち方」といきなりテンションが上がった。主旨は、クライミングコンペは「オンサイトリード方式によるディフィカルト競技」（リード方式でどこまで登れたかという技術の競争。時間は判定されない。）が中心である点、選手をいかに公平にかつ気持ちよく登ってもらうかという点、競技であるが観客を楽しませる事も必要である点（私見であるが、確かに無言で行なわれたらやっている本人以外つまらない競技になってしまう。）等が話され、時折体験に基づく失敗談もあり、面白かった。

小日向氏による安全管理についての講義は、「事故の賠償責任などコンペの開催は主催者の責任が生じる。」と、「自己責任」が当然である我々山屋にとってはいささか大変な事もあるのだと教わった。

山本氏によるクライミングのルールについては、公平にジャッジするために具体論であった。

東氏のルートのセッティングについては、ルートは・メンバーを見て結果が出やすいように（すなわち登れる高さが散らばるように）。・1／3位までは全員が登れるように（そうしないと次から来てくれなくなる）。見せ場を作る（落ちるときは派手に↑観客用）。・選手の安全を確保できるルート、ホールド等を考える。等について講義された。

岡本氏による国体については様々な論議のある登山の国体競技についてだが、・数年後に大きな見直しをするので小さな変更は難しいこと。・開催県は8年以上前から準備しているので簡単に変えられないこと。・来年度、大阪大会から登攀はオンサイトリード方式になること。・今後は踏査競技の廃止、少年への登攀の導入という方向を何時、どの様に行うかが論議になっていること等が話された。

夜は懇親会。非常に盛り上がり、夜更けまでクライミングの現状や未来について熱い論議が交わされた。新潟県が持って行った「越の寒梅」「八海山」は瞬時に無くなったのは言うまでもない。

翌日の模擬コンペは大岩氏、山崎氏など錚々たるメンバーが面白可笑しくしてくれた。ルールの隙間を付く（わざとらしい）抗議や演技、ジャッジ泣かせのクライミングなど本で読んだだけでは分からないことを実践的に教えてくれた。

以上、学んだことは多いが、新潟県に実践して行くことが今後の課題になる。雪国新潟で気軽に出来る冬のスポーツとして可能性のある事ではある。

今回の国体予選でも成年男子の登攀競技は稲田氏による設定でオンサイトリード方式を取った。これは今までの地元有利、他県は遠征しない限り練習できないといった不公平さが無い。よりスポーツ化できたのではないだろうか。今後、各地区にフリークライミングの施設が出来て選手の育成、技術の普及ができてほしいものである。

平成7年度 指導員研修会報告 ④

指導員会　三富一弥

「組織遭難の整備」

会の中で事故が起きた時にはどんな連絡経路をとって会員に知らせるか。そして出動態勢は、どんな指揮体制がとられるか。そして救助能力は現実的にうちの会はどの程度やれるのか。こういった事は、組織である以上整備しておく必要がある。

「法的問題」

事故が起きるといろいろ法律上の問題がでてくる。都岳連でも顧問弁護士がおりますので、何か事があると相談する事ができます。

遭難対策を簡単にお話しますと、事前に自分の親に対して、自分がどういうふうな山登りをしているか話しをしてないことが以外に多い。東京の場合各地方から出てきている人が多い。単身でいる人が親元に、普段自分がどういう活動をしているのか知らせていない。親は子供が山登りをしているのは分かっているが、その山登りはどういった山登りをしているのか、岩登りをしているのか、ハイキングを

しているのか知っていない。具体的に事故があった時の事を考え、普段の活動状況は知らせておいた方が若し何かあった場合、法的問題でこじれずスムーズにいく事と思います。

東京に居る人は、親元、家族に知らせる人が少なく、事故が起きた時に初めて、こんな危険な事をやっていたのかと家族が知るわけです。そして対応が難しくなるケースがあります。

組織に属している人であったなら、会員は家族に対して登山活動している事ぐらいは話すように指導することが、第一段階の法的な処理かと思います。

「連　絡」

組織である以上はある程度連絡用紙みたいな物を作っておくのがよい。何かあった時は冷静に対処できる人はそれ程多くはない。だから事故のあった場合、冷静に前もって対処できる会員に緊急の連絡用紙を作っておいて手渡しておく。そして事故を起こした人はそれに沿ってメモして、あるいは伝達して、速通報で第一報を確実のものにしておくこれが緊急連絡という事です。

南極だより6号

越冬隊員　片桐一夫

（1996・7・22ドーム基地FAX発）

今日をもちまして、我々第37次日本南極地域観測隊、越冬隊のメンバーは越冬中日（なかび）を迎えました。ちょうど251日目となります。

帰還まで残り250日でドーム基地滞在は6ケ月を切りました。

ここまで書いたところで土田幸雄さんより電話で中断となりましたが、さて、今日は氷床掘削に付いてお知らせいたします。

我々のドーム基地は南極大陸で2番目に高い氷床上にあり、ドームFと呼ばれています。このドームFは、標高3810mで氷厚が2950mと言われていましたが今回、我々のメンバーが最新のアイスレーダーで氷厚測定したところ、3080m付近に基盤岩の反射があり、従来より少しだけ厚い氷床で有ることが判りました。我々はこの氷床に穴をあけて2500mまで掘り進み、その氷のコアを持ち帰ることが任務ですが、今日は、1760m付近までいくと思います。これまでの所、きわめて順調ですが、いつ大トラブルが発生するか判らず、毎日淡々と掘っていますが、それなりに緊張感を持ちながら作業を進めております。幸いにこれまでの所は何とか解決できるトラブルだけにとどまっています。2500mがどういう意味を持っているかともうしますと、我々の現在住んでいる地球環境は、間氷期と言って温暖な気候が続いていますが、1万5千年ほど溯りますと地球環境は氷期（氷河期）でした。この氷期は11万年前から始まっており、さらにその前が間氷期で、1万年ほどありました。これらの気候環境が氷床の中に、気泡となって保存されているわけです。我々のシュミレーションでは、ドームFの氷では、2500m深の氷は地球環境を20万年も溯ることが出来ます。これらの氷コアを持ち帰り、分析して過去の地球環境を知り、将来の環境を予測して我々の宇宙船地球号の将来に備えようというのが大目標となります。

硬い話となりましたが、さて、ミッドウインターが終わってちょうど1カ月、極夜は後1カ月近く続きますが、朝（？）8時頃には北東の地平線（？）に朝焼けの兆しが見え始めました。正午頃には懐中電灯が無くても基地の外を歩くことが出来ます。外気温は、まだまだマイナス70℃前後を記録していますが我々のドーム基地に確実に朝が到来しつつ有ることを物語っております。ちなみに昭和基地では、7月13日に朝が到来したそうです。

次回は、朝を迎えたドーム基地の様子をお届けする予定です。また、帰還に際しては、ささやかですが南極の氷を皆様へのおみやげにして持ち帰るつもりです。ではまた！

新潟県山岳協会・海外登山研究会
開　催　案　内

趣旨　県内岳人に海外登山に関する最新情報を提供するとともに、海外登山に関心のある岳人相互の交流及び情報交換の機会とするために開催する。

主管　新潟県山岳協会海外登山委員会

期日　平成8年9月28日(土)　午後7時～9時

期日　新潟市万代市民会館　新潟市東万代町9番1号
☎025－246－7711

内容　①主催者あいさつ
②海外登山隊報告
・千葉工業大学　ナンガ・パルバット登山隊1995
1995年7月、ナンガ・パルバット（8125m）北面で新ルートを開拓して登頂に成功、同ルートを「千葉工業大学ルート」と命名した。
・報告者　同登山隊隊長　坂井広志氏
・スライドを多数使用する予定。
③質疑及び意見交換
④閉会

その他について
・研究会終了後、会場を移して懇親会を予定。
・研究会参加費　1000円
・研究会事務局（連絡・照会先）
新潟県山岳協会海外登山委員会　田中純夫
新潟市川岸町2丁目13番地7　☎025－267－2743
・参加希望者は当日、会場へお越し下さい。

登山用品専門店
―― 信頼できるパートナー ――
大新スポーツ
新潟市東堀6 ☎(025)222-3736